

初年次学生の情報認識と表現のあり方

——カテゴリー化の観点から——

荒木 弘子
ARAKI Hiroko

1. はじめに

愛知淑徳大学においては全学共通教育科目として日本語表現科目を複数開講している。そのうち初年次学生を対象とした基礎科目は、「日本語表現 T1」（全学部必修・前期）と「日本語表現 T2」（一部学部必修・後期）であり、学生は口頭発表やレポート執筆を通して、大学の学修に必要な日本語の基礎的技術を総合的に学ぶ。

大学の学修に必要な日本語の技術が活かされるべきはたとえば論文執筆の場においてである。では論文執筆時に必要とされる技術にはどのようなものがあるか。外山滋比古は『思考の整理学』の中で次のように述べている¹⁾。

もっとも具体的、即物的な思考、知識は第一次的である。その同種を集め整理し、相互に関連づけると、二次的思考、知識が生れる。これをさらに同種のもの間で昇華させると、第三次の情報ができるようになる。(中略)いわゆる論文は、一次的情報であってはならない。二次的情報でもなお昇華度が不足である。第三次の情報であることを必要とする。

つまり論文執筆において求められるものの1つは複数の情報を集めて抽象化し相互に関連づける技術、すなわちカテゴリー化の技術であるといえる。

本稿では学生の書く文章の多くが第一次情報の羅列にとどまっていることを具体例とともに示し、その原因を「カテゴリー化」の観点から考察する。その上で、上記2科目の授業内容に基づき、今後の課題を検討する。

2. カテゴリー化とは

本題に入る前に、本稿におけるカテゴリー化の定義を確認する。カテゴリー化とは、複数の物事を共通点に基づいて、下位概念の集合、部分の集合、個別の物事の集合などにグループ化してラベルをつけることである。たとえば、「トイプードル」と「ポメラニアン」、「マルチーズ」はグループ化して「犬」というラベルをつけられるため、「犬」カテゴリーに分類できる。カテゴリー化をおこなうと、同一カテゴリー内の構成要素間の比較とともに、カテゴリー間の比較（たとえば「犬」と「猫」）が可能になるという利点がある。

また、あるカテゴリーの構成要素は別の複数のカテゴリー

の構成要素になることができるという特徴もある。たとえば上述の三種の犬は「小型犬」あるいは「洋犬」というカテゴリーにも分類できる。さらには飼育環境や飼育頭数などの基準を立て、独自のカテゴリーに分類することも可能である。つまり目的に応じたカテゴリーの設定が認められるため、分析の幅を広げられるのである。

加えて、カテゴリーを利用して情報を階層化することで抽象度による分類も可能になる。ツリーマップでは一般的に抽象度の高い要素が上位に置かれる。この時、階層の異なる要素を並列させることがカテゴリーミステイクである。たとえば、「犬と動物」という表現が許容されないのは、異なる階層に属する要素が並べられているためである。並列する要素はあくまでも同じ階層上に位置する同一カテゴリーの構成要素であることが求められる。

3. 事例

本章では「日本語表現 T1」「日本語表現 T2」で学生が実際に作成した小論文やレポート、あるいはその執筆過程において見られた問題点のうち、「カテゴリー化」に関わるものを取り上げる。

3.1 語のカテゴリー化

以下は学生のレポートで散見されるカテゴリーミステイクの例である。

(1) 専門家や教授が意見を述べている。

ここでのカテゴリーミステイクの原因は2つあると考えられる。第一は「専門家」と「教授」という語を、それぞれの定義を確認せずに用いていることである。「教授」という語の正確な意味を知らない学生は少なからず存在する。第二は、二語の関係に無頓着なことである。(1)の場合、二語を並列させる前に「教授」と「専門家」との概念関係を見直さなければならないが、この文を作成した学生は参照した資料に書かれていた肩書をそのまま書き写している、つまり第一次情報を羅列しているに過ぎないのである。語の意味を別の語との関係において正確に捉えようという意識が希薄であるがために、類似する複数の語の関係にも気が付かないということである。

このことは、テストの結果にも如実に表れている。「日

本語表現 T2」では授業中に小テスト（全10回）を実施している²⁾。その中で、学生の点数が伸び悩むのが「二語の関係」を問う回である。当該回では、与えられた二語が①類義語②対義語③上位語・下位語④謙譲語と尊敬語⑤行為と対象、のいずれの関係にあるかを問う。筆者の担当クラスでは、その他の回の平均点が最高で3.0点（3点満点）、最低でも1.82点である中、当該回の平均点は1.46点から1.94点と、2点未満にとどまっており、すべてのクラスにおいてもっとも低かった³⁾。語の意味を別の語との関係において捉えることを学生は苦手に行っているのである。

3.2 文（文章）のカテゴリー化

文あるいは文章で表現される情報の分類は学生がさらに苦手とする分野である。以下では、1年次前期に執筆する小論文と、1年次後期に書くレポートを例に述べる。

ここで取り上げる小論文のテーマは「所属キャンパスの特徴」である。学生は執筆に先立ち、キャンパスの長所・短所を自由に挙げ、それをカテゴリー化するが、その際、適切に分類できるとは限らない。たとえば「敷地が狭い」「門から入口が遠い」などの特徴を「設備」というカテゴリー名のもとに集約した学生グループがあった。このようなカテゴリーができあがった原因の1つは「設備」の意味が理解できていないことにある。いうまでもなく、適切なカテゴリー化を実現するためには適切なカテゴリー名を設定する必要がある。つまり、語彙力の欠如は適切なカテゴリー化を妨げ得ると言える。

また、カテゴリーと構成要素の関係は適切であったとしても、カテゴリー間の関係や、同一の要素が複数のカテゴリーに所属し得る可能性まで考慮できる学生は多くない。たとえば、「食堂が少なく不便だ」という意見が一旦「学食」カテゴリーに組み込まれてしまえば、「学食」カテゴリーの外に置かれた「キャンパス周辺に学生向けの飲食店が多く便利だ」という、同じく飲食環境に関する意見との関連付けがなされなくなるということである。

上述の傾向は、1年次後期に提出されるレポートにおいても同様に見られる。レポートでは学生は特定の社会問題をめぐる議論の論点整理に挑戦するが、論点（カテゴリー）を正確に設定できないと、論点をめぐる意見（カテゴリー内に含まれるべき情報）を選ぶ基準が曖昧になり、結果として論点整理に失敗することになる。これはつまり論者の意見が書かれている資料が正しく理解できないために各意見の共通点が見出せず、抽象化できないという事実と表裏一体の関係にあるため、読解力の問題が根底にあることも否定できない。また、論点別の議論の分類に成功したとしても、論点間の関係を見極めて整理するには至らないという問題もある。

以上のように、学生の情報認識のあり方やその表現に

見られる問題の背景には、複数の要素間の関係を見極め、正確なカテゴリーを設定しようという意識の欠如がある。しかし、論文に記述されるべき第三次的情報は、カテゴリー化の過程で関連情報との関係性を正しく捉えることによって得られるものである。つまり、情報のカテゴリー化は早期に習得が望まれる技術といえる。

4. 授業におけるとりくみ

「日本語表現 T1」「日本語表現 T2」では、複数の情報を整理する機会が多く与えられている。にもかかわらずカテゴリー化の技術が身につかないのはなぜであろうか。以下ではテキスト上で用いられている表現に注目する。

両授業においては、ブレインストーミングを通して情報の整理・統合をおこなう機会が4回ある。その際、テキスト上で用いられる表現は「まとめり」である。たとえば「共通する項目ごとに付箋を貼り直し、まとめりを作る」「まとめりごとに見出しをつけ」などである。つまり、「カテゴリー」とは異なり、階層関係や並列関係を想起させにくい語が使われていると言える。

また、情報整理の作業はグループメンバーが出し合ったアイデアを複数の「まとめり」に分け、補足すべき情報を探すところで終了する。このことから、「まとめり」内部の要素間の関係や「まとめり」と「まとめり」との関係を意識させるには至っていないと考えられる。

5. 今後の課題

本稿では、初年次学生の情報認識あるいは表現のあり方において見出される問題の背景に正確なカテゴリー設定を目指す意識の欠如が存在することを論じてきた。

論文・レポートの執筆にあたっては、個別の情報を集めて整理した上で分析しなければならない。そのためには、類似する情報の集約にとどまらず、適切な階層構造に基づく分類をおこなうことが求められる。したがって、共通点・相違点をもとに情報を整理する装置としてのカテゴリーの役割を知ることは重要である。カテゴリー化の意味は情報を抽象化する過程で、より正確に物事を認識することにある。カテゴリー化の重要性を教員が認識し、階層構造に基づいた情報の整理の仕方に慣れさせる方法を模索することが求められよう。

注

- 1 外山滋比古『思考の整理学』筑摩書房、2016年。
- 2 本学初年次教育部門が「日本語検定」2～3級の出題範囲・出題形式に倣って、「敬語」「文法」「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」の領域から問題を作成したテストである。15問から20問で構成される。
- 3 データは2016年前期に筆者が担当した全6クラス・177人を対象に集計・算出したものである。